

はじめに

小田急線柏江駅、停まつて いる車窓からホームの看板が見えた。教会の看板だつた。それには「神様は乗り越えられる試練しか与えない」とあつた。そうか、そうかもしれない、信じてみよう……と思つた。

ここ三年位、乾いた草木が水を求めるように溢れるほどの本を読んだ。坂東巡礼めぐりをして先達にあわせて大声で般若心経を唱えたりもした。

とにかく、じつとしていられなかつた。外へ疲れるほどに出歩いたりもした。

そして、少し心が解れて気付いた。

ひとつは、自分の手元にある数々の写真や手紙は共に生きた日々の跡が残つている。それを時々読み返すと、その人への想い、笑い声や息づかいが蘇る。

その気持ちを共感し合いたい。

ふたつめは、流れ星のように別れた人達がいた。
ふいの災害や病のために言葉を遺せず亡くなつた人
達。彼らと共に生きた日々を残しておきたいと思つ
た。

その文章を並べて点から線に繋いでみる。さらに
エピソードや想い出を加えて線を面へとし、自分史
にまとめてみよう。

古く縮こまつた毛糸を解し、暖かいセーターに編
み直すように。

「忘れないよ。覚えていたい」と想い、感謝のメツ
セージを込めて……。

だから、自分史であり O U R · H I S T O R Y。^{アワー ヒストリー}
幼稚ながら、喜び・愛をふり返るエピソードを
語りたい。

*1 私達の歴史

第一章 甘酸っぱいいちつちつこ



実家から湾を眺む（約 25 年前）

初めての家族写真

岩手県三陸村はリアス式海岸沿い。岬突端みさきとつばん

「首崎」辺りは豊かな漁場ぎょばが在った。内湾うちわんは若布わかめ。

海苔のりが繁り、雲丹・鮑あわびなどの海の幸に恵まれていた。

私は第一次ベビーブームに山合やまあいの公民館こうみんかん*¹で生ま

れた。母は四十一才ちなだった。誕生が重陽ちゅうようの節句前後

だつたのでそれに恩ちなんで名前をつけてくれた。

住まいの公民館は竈くどのある台所と二部屋ふとんだった。

一つの布団ふとんに何人も一緒に寝ていた。初めの風呂かづこうは

外の堀つ立て小屋こらわだった。使われていない時の公民

館の広間は格好かっこうの遊び場。布団置き用の継ぎ板机つないたづくえで

卓球たっきゅうもしたと言う。公民館利用者はトイレに行く時、

*²

茶の間ごめんを「ごめんなはりやんせ」と言いながら通とおつた。

三陸では土地も細く、この公民館奥あが空いていた

のは幸運こううんだつたと思う。

山合いの公民館

台所と寝室の間に
茶の間に入る間がある

三五郎さんの家へ
ゆく道

